



円形脱毛症と男性型脱毛症の治療

●円形脱毛症

病 因

毛包組織に対する自己免疫疾患と考えられています。HLA遺伝子タイプのアリル、免疫に関わる分子の遺伝子多型を背景にして、疲労や感染症など肉体的、精神的ストレスが引き金になるとされますが、実際には明らかな誘因がないことが多いです。

治療法

日本皮膚科学会のガイドラインでは、推奨度としてA(行うよう強く勧める)、B(行うよう勧める)、C1(行ってもよい)、C2(行わないほうがよい)、D(行うべきではない)に分類されています。日常診療で処方されることの多い、ステロイド・抗ヒスタミン薬・セファランチン[®]・グリチロン[®]内服療法、ミノキシジル・フロジン[®]外用療法、液体窒素療法などは全てC1に属します。

このガイドラインではAに該当するものはなく、Bに挙げられるものにはステロイド外用療法、ステロイド局所注射療法、局所免疫療法があります。

当科での治療法

当科では通常の治療に反応しない難治性の症例をご紹介頂く機会が多いため、主にステロイド局所注射療法と局所免疫療法を用いています。

ステロイド局所注射療法は、ステロイドにより局所の過剰免疫反応を抑制することによって発毛を促します。2～4週毎にステロイドを同一部位に局所注射し、数回継続すると発毛がみられます。欠点としては、局所注射部位にしか効果が得られないことです。

局所免疫療法とは、当科では試薬であるsquaric

acid dibutylester (SADBE) を用いています。SADBEを外用して、人工的に接触皮膚炎を惹起させることにより発毛を促します。円形脱毛症における毛包周囲のリンパ球と、接触皮膚炎誘発時の毛包周囲のリンパ球サブセットが変化することは知られていますが、正確な作用機序は不明です。これも2～4週毎に外用しますが、欠点としては、接触皮膚炎の症状が強く継続困難になる場合もあります。

●男性型脱毛症

病 因

男性型脱毛症の原因は男性ホルモンが影響しています。テストステロンが酵素のはたらきにより、ジヒドロテストステロンに変化します。このジヒドロテストステロンが頭髪に作用して、元々硬くコシのあった毛を、柔らかい猫毛のような軟毛に変化させ、成長期を短縮させることにより毛が生えなくなってきます。

治療法

テストステロンからジヒドロテストステロンに変化する際、5 α 還元酵素が重要です。この酵素は大きくI型とII型に分けられます。そのII型を抑えてジヒドロテストステロン量を減らすものがフィナステリド、I型とII型の両方を抑えるものがデュタステリドです。これらの抗男性ホルモン薬の効果は、脱毛前の状態にまで回復させることは困難ですが、少なくとも進行を遅らせるはたらきはあると個人的印象を持っています。ガイドライン上、両者内服療法とミノキシジル外用療法がAに分類されています。

新しい治療法

永年にわたり毛の移植が行われ、毛包の色々な部位の移植結果により、毛包基部の膨らみである毛球部(図1)が重要であることが分かっていました。当初は毛球部内の毛乳頭が重要視されていましたが、移植後の発毛効果は確かにあるものの期待されたレベルではありませんでした。近年、毛包全体を覆う鞘(さや)である毛根鞘のうち、特に毛球部周囲の毛根鞘(毛球部毛根鞘図1)が新たに注目されました。マウスの毛球部毛根鞘細胞を培養し、マウスの無毛部に注射して、発毛がみられたことが報告されました。これを応用した結果、ヒトでも同手法により発毛効果がみられたことが報告されたばかりです¹⁾。この方法は抗男性ホルモン薬が使用できない女性も対象となるため、今後、期待される治療法のひとつです。

文献

- 1) Tsuboi R, Niiyama S, Irisawa R, et al. J Am Acad Dermatol 83; 109-116: 2020.

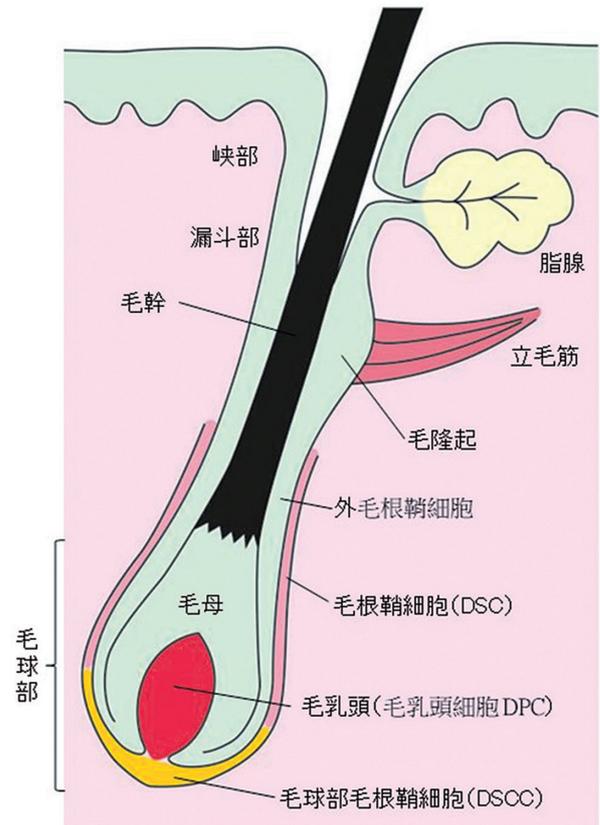


図1 毛包の構造

診療のご予約は・・・

病診連携部門あてに「診察・検査FAX予約申込書」をお送り下さい。

病診連携連絡先

病診連携部門

TEL: 03-3481-7385 FAX: 03-3468-6191



東邦大学 | 大橋病院
医療センター | Toho University Ohashi Medical Center

〒153-8515 東京都目黒区大橋2-22-36 電話 03-3468-1251
http://www.ohashi_med.toho-u.ac.jp/
携帯用サイト http://www.ohashi_med.toho-u.ac.jp/m/

